

ポイ捨てせずに分別しよう

分別法の紹介



- ① 缶類として出せるもの
- ジュース缶
 - ビール缶
 - 菓子缶
 - 缶詰
 - ミルク缶
 - 海苔缶

飲料用の缶の使用料は、自動販売機の普及とともに急増し、国民1人あたり1日1本のレベルに達しています。空き缶は、廃棄物処理の負担を増すばかりでなく、ポイ捨てなど社会問題にもなっています。缶類を分別して出すと収益金があります。このお金は、各集落に還元金として返しています。缶類の分別法を知り、道路へのポイ捨ては、絶対にやめましょう。



② 中を水ですすぐ
水で軽くすすぎ、中にはタバコなどの異物を絶対に入れない



③ 表示を見て分別する
素材表示マークを見て、アルミ缶とスチール缶に分け、ネットに入れる



燃えないごみへ
塗料の缶、オイル缶、食用の油缶などは中身をふき取り、スプレー缶やカセットボンベは使い切り、穴をあけて、燃えないごみとして出す



なぜ、3Rなのか

日本での資源等の投入量は、年間19・78億ト(2003年度)。このうち4・2億トはエネルギーとして消費され、主に排気ガスとして大気へ放出されます。また、5・8億トは廃棄物(ゴミ)として排出されています。投入された資源の5割は、建設物などのストックとなりますが、これらも数十年後には取り壊され廃棄物となります。

これまでゴミ処理問題は、「いかに適正に処理するか」に重点が置かれてきましたが、埋め立て地(最終処分場)の問題や、焼却時に排出されるCO₂(二酸化炭素)の地球温暖化に及ぼす影響、有限な資源の有効利用などの観点から、「いかにゴミそのものの量を減らすか」に移ってきました。

ゴミの量を減らすためには、ゴミの発生を抑制(リデュース・Reduce)すること、不要となったものは再利用(リユース・Reuse)すること、再使用できないものは資源として再生利用(リサイクル・Recycle)すること、すなわち「3R」を推進することが重要です。

この3Rの取り組みを進めて、社会経済活動を循環型に転換していき、究極的にはゴミゼロ社会を目指すことが、国際的な共通認識になっています。その実現のためには、資源から製品、消費、廃棄に至る流れを把握し、それぞれの段階で資源の有効利用、再生利用の検討を加え、資源・エネルギーを大切に使用していく意識を高める必要があるのです。

Reduce, Reuse, Recycle